

氏名・(本籍地)	沼尻 憲尚 (栃木県)
学位の種類	博士 (仏教学)
学位記の番号	甲第91号
学位授与の日付	平成25年3月15日
学位論文題目	真言僧杲宝の研究
論文審査委員	主査 榭 義孝 副査 松崎 恵水 副査 木村 秀明

沼尻憲尚氏 学位請求論文審査報告書

「真言僧杲宝の研究」

論文の内容の要旨

杲宝(1306～1362)は、頼宝・賢宝と並んで「東寺の三宝」と称されるだけでなく、頼瑜・宥快と並んで「教相の三師」と並び称される真言教学を代表する学侶の一人である。現在でも、その著書は真言密教の研究にはなくてはならないものである。

このように、多くの足跡を残している杲宝であるが、杲宝の残した鈔物類を引用することはあっても、杲宝の生涯、教学の総合的な研究は管見では見あたらない。本論考は、そのような杲宝の総合的な研究であり、今後の真言教学の研究に大いに貢献するものとなろう。第一篇「杲宝の生涯」、第二篇「杲宝の教相と事相」の二篇構成である。

第一篇は、四章構成である。第一章「生涯を記す資料について」では、『杲宝僧都事実』と『雑々見聞記』を挙げている。『杲宝僧都事実』は「杲快僧正の口授」とされる。杲快は1600年代後半に活躍した東寺僧であり、杲宝から300年も後の人であるので記述については注意を要するものとされている。それを補うのが『雑々見聞記』であり、杲宝自身と弟子の賢宝が杲宝

の略歴を記したものとされている。

第二章～第四章では、杲宝の生涯を第一期元亨三年（1323）～建武二年（1335）、高野山に入山し、高野山・東寺で真言教学を中心に研鑽した期間、第二期建武三年から（1336）～貞和四年（1348）、談義や論義に参加して読師を勤め、事教二相の研鑽に努力した期間、第三期貞和五年（1349）～康安二年（1362）、東寺勸学会学頭に補任され学徒を指南する立場になった期間に分けて考察している。その方法は、杲宝が残した多くの書写文献の奥書を丁寧に見ていくことによって、それぞれの時期の活動を分析している。

第二篇は、第一章「杲宝書写『即身義見聞』について——青年期における杲宝の教学背景を探る——」、第二章「杲宝の真言教学について（「教主義」を中心として）、第三章「杲宝の禅宗理解について」、第四章「杲宝の字相について」の四章構成である。第一章では、杲宝が書写した『即身義見聞』の概要、巻一、二の翻刻とその概要、ほかの『即身成仏義』の注釈書とその比較をしている。『即身義見聞』は未翻刻であり、その著者は不明であるが、杲宝が巻一を元亨四年（1324）に書写しているのもそれ以前の成立である。

第二章では、杲宝の真言教学に関する見解をまとめている書を、教主義を中心にして言及している。教主義は『大日経』の教主である大日如来を論ずるものであり、頼諭が自性身上の加持身を教主とするいわゆる加持身説を提唱すると、高野山・東寺はそれぞれの立場から本地身説を主張して加持身説に反論している。杲宝は東寺の一員として本地身説を論じるが、杲宝の教主義を三節に分けて論じている。

第三章では、杲宝の禅宗理解が述べられている。近年、真言教学と浄土教の関係についての論考が行われているが、最近は真言教学と禅宗との関係についての考察が増えている。この第三章もそのひとつである。禅の優位性を説く夢窓疎石に対して、杲宝は『開心抄』を著して真言宗の優位性を述べているが、ここでは『開心抄』を中心に杲宝の禅宗理解について論究している。

第四章は、杲宝の事相である。真言宗の学侶は、事教二相の研鑽が常であるが、杲宝も諸流を相承している。杲宝が師事した諸師を中心にその法流、そして勸修寺流慈尊院方の受法に際し記された『杲宝入檀記』を中心に考察している。杲宝が受法した法流は金三流槇尾方（金剛王院相伝三宝院流の定

清方)、勤修寺流慈尊院方、仁和御流系統の三流に集約できること、『杲宝入檀記』では受法中の諸事について細かく論究されている。

審査結果の要旨

本論文は杲宝の総合的な研究である。杲宝は教相の三師と称されるにも拘わらず、現状では生涯はもちろんのこと、思想についても十分な研究がなされていない。その観点からすれば本論考はこれからの杲宝研究に大きく貢献することが期待できる。

第一篇で杲宝の生涯について考察している。従来は杲宝の生涯を考察する際は、江戸期の成立の『杲宝僧都事実』に基づくのが基本であった。しかしながら、300年も後の成立であるので記述内容について信頼性に疑問が呈せられていた。そこで本論文では杲宝自身と弟子の賢宝が記したとされる『雑々見聞記』を用いて考察している。その結果、『杲宝僧都事実』の内容はほぼ『雑々見聞記』と同一であり、『杲宝僧都事実』は『雑々見聞記』を参考にして書かれており、その内容は信頼を寄せられる資料として捉えて差し支えないと言えるだろう、と結論づけた。

また、『雑々見聞記』を用いるほかに、杲宝が残した多くの書写文献の奥書を丁寧に点検していく方法をとっている。自らの著作以外に多くの文献を書写した杲宝だからこそ取れる方法論であるが、これも新しい視点であり、非常に適切な方法だと思う。その結果、杲宝の生涯を三期に分けて考察することができた。これも今後の杲宝研究の指針になるであろう。

第二篇は、杲宝の教相と事相である。第一章では杲宝が書写した未翻刻本『即身義見聞』の翻刻と同時期の『即身義』の注釈書との比較考察である。翻刻自体は斯界に大いに貢献するところであるが、沼尻氏が意図した「杲宝の思想に影響を及ぼす教学背景の解明につながるもの」であるかは疑問である。

第二章では杲宝の教主義を中心として論じている。杲宝は頼諭の直後の人であるために、頼諭の提唱した「自性身上加持身説」に対して、反論として従来の本地身説を述べている。しかし、杲宝は、道範の六大不二思想、頼宝

の自証位における解釈である不二思想の影響を受けて、聖憲の自性身上加持身説に構造的には似通った点があると指摘している。評者は、教主義における不二而二思想の影響はそれほどではないと考えるが、同じ不二思想の立場に在るといわれる頼瑜・聖憲、道範・杲宝の教主義が構造的に似通っているとの指摘は、首肯できる。

頼瑜の教主義が新義と云われる所以について、それ以前の随他意の加持身説と区別するために新義と称されるのではないかと述べているが、この点については疑問を呈する。

第三章では、禅宗との関わりを考察している。『開心抄』を著し、禅宗に対する批判、禅宗で依用することの多い真言教理の正しい理解を示し、真言宗の優位性を徹底して主張して、禅宗を顕教に配属し、それが方便行の段階に他ならないと断言している。

第四章「杲宝の事相について」第二節「『杲宝入壇記』について」において、杲宝に伝法灌頂を受けた栄海が、灌頂の仔細を記録して受者の杲宝に与えた『杲宝入壇記』について考察している。その中において、栄海による夢判断の記述について先行研究にしたがって阿闍梨である栄海自身が見た夢の記録として論じている。しかし、これは明らかに受者の杲宝が見た夢を杲宝が阿闍梨の栄海に報告し、その夢について栄海が吉凶を判断した記録と思われる。因みに夢判断の参考資料として同所に引用されている『大日経』「具縁品」の文と、それを釈した『大日経疏』の文は、七日作壇法における第六日目の夜に受法の弟子が見た夢について授法の阿闍梨がその吉凶を占う箇所
の文である。密教儀礼における灌頂についてさらに調査をして、緻密な論証により先行研究の訂正を行い、学界に貢献することが期待される。

未だその全容が解明されていない杲宝の伝記や思想について、現在残されている確実な資料を駆使して研究し、新事実を解明しており、博士論文としての価値を有するものと判定する。